海とともに 発展してきた街 「呉」

街plus
探訪

海上保安大学校 山中仁昭 Masaaki Yamanaka

1 はじめに

呉市は人口 30 万人弱の地方都市で、戦時中、戦艦大和が建造された街として知られています。最近、長編アニメーション「世界の片隅に」が全国的大ヒットとなり、その舞台としても注目されてきているように思います。今でも所々に以前の軍港としての色が残る呉ですが、古くから海に隣接して発展してきた街でもあります。私は呉に住んで今年で 16 年目となります。まだまだ呉住民としての経験が浅いところがございますが、これまでに感じてきた海とのつながりを中心に呉の街を御紹介させて頂きたいと思います。記事内に幾つか地名が出てきますが、記事の末尾に地図を載せております（図 11、12）。合わせて御覧頂けましたら幸いです。

2 呉の立地

呉とお聞きになられてその所在がお分かりにならない方も多くおられるのではないかと思います。呉は広島県の南部、瀬戸内海に面した街です。図 1 の写真は呉の市街地北部にある灰ヶ峰の山頂から撮った写真ですが、呉の街が海に面していることがよく分かって頂けると思います。街の前面に広がるのが瀬戸内海で多くの島々が見えます。その昔、明治政府が呉に海軍の拠点の一つとして軍の鎮守府を置いた理由に、瀬戸内海の島々に守られた立地があったと聞きます。その後、呉は軍港として発展しますが、内海で海も穏やかであったことから大型船舶の建造にも適していました。呉海軍工廠が設置され（設置当初は呉鎮守府造船部）、日清戦争時には多くの艦艇が手掛けられました。また、明治政府は潜水艦の建造にも力を入れ、イギリス政府から潜水艦 2 艇を買い入れると呉海軍工廠で国産潜水艦の開発を進めたと言われています。呉の街は多くの人が集まり、当時、急速に発展しました。

図 1 灰ヶ峰から呉市街を望む景色

このように話を進めていくと戦争の色の濃い、灰色がかった文面となってしまいますが、話を図 1 の灰ヶ峰に戻しますと、灰ヶ峰の標高は 737m と高く、とても見晴らしの良い場所です。瀬戸内海の島々が見渡せて、晴れた日には遠い四国の最高峰・石鎚山を望むことができます。特に呉市街を見下ろす夜景が絶景で、今はとてもロマンチックな場所となっています。私も結婚前に何回か妻と一緒にドライブしたことを思い出します。また、呉には多くの島々があり、古くから瀬戸内海を通る船の往来によって発展してきました。今では大小様々な橋が架けられ、島々に点在する町へ手軽に出掛けることができます。そうした島々では古くからの海とのつながりに触れることができます。少し時代も遡りながら呉の街を御紹介させて頂きたいと思います。

3 遣唐使船のふるさと倉橋島

呉の歴史は古く、日本書紀に關係する記述が出てきます。日本書紀 22 卷推古天皇紀に「是年、河邊臣名を闕せり、安藝國に遣して舶を造らしむ。（遣河邊臣闕名於安藝國令造船）」という記載があり、この記載の中の「安藝國」が呉の倉橋島になるという説が有力です。倉橋島には当時、崇峻天皇から倉橋部という官名を賜った民がいて、造船に必要な工具を所有しており、朝廷

からの派遣団が船を造りに来たと言われています。この船が大和朝廷から唐の国へ遣わされた遣唐使船で、倉橋島は遣唐使船のふるさととして知られています。倉橋島には大小様々な入り江や湾があり、その一つに桂浜（図2）があります。とても穏やかな浜で、現在はバーベキューをしたり、パドルボードを漕いだりする人で休日にはにぎわっているのですが、桂浜の隅に「長門の造船歴史館」が建っています。歴史館では、復元した遣唐使船を展示しているほか（図3）、古代から現代までの木造船模型があり、その歴史に触れることができます。ちなみに遣唐使使節団は全15回、朝廷から唐の国へ遣わされたと言われています。その間に24隻の遣唐使船が建造されたそうで、24隻のうち19隻が倉橋島で建造されたということです。第1号は推古天皇26年（西暦618年）に造られました。昨年は遣唐使船建造の1,400年の節目の年と言われています。

4 平清盛によって切り開かれた音戸の瀬戸

時代を進めて平安時代に入りますと、瀬戸内海は国内各地、また中国大陆を結ぶ重要な航路となって発展します。多くの物資を運ぶ船が往来するようになり、海賊も多く出現するようになりました。平安時代、船荷を奪う海賊を治めたのが平家一門で、特に平清盛は

朝廷より安芸守に命じられ、宮島の厳島神社を再建するなどして支配力を強めたと言われています。

当時、航海技術は急速に発展しましたが、瀬戸内海は干満の差が大きく潮流の影響を大きく受けることから、「地乗り」と呼ばれる陸地沿いを走る航海が主流でした。沿岸を多くの船が航行し、港を中心に町が形成されました。その一つに音戸と呼ばれる地区があり、平清盛にちなんだ逸話が残されています。

音戸地区は先ほど御紹介した倉橋島と現在の呉市街の中間、呉市街（本州側）と倉橋島の境にあります。本州側から倉橋島へ渡る海峡は音戸の瀬戸（図4）と呼ばれていて船がやっと行き違える程度しかないので、当時の地乗り航路として栄えた場所でした。元々は岩礁が見え隠れする浅瀬だったと言われており、平清盛によって切り開かれたと言われています。音戸の瀬戸を1日で開削するために、平清盛が暮れかける夕日を扇であおるようにして呼び戻したとされており、「日招きの伝説」として語り継がれています。

図5は音戸の瀬戸に架かる音戸大橋の真下から撮った写真です。橋のもとには清盛塚と呼ばれるほこらがあります。平清盛は瀬戸開削の工事にあたり、人柱の代わりに一字一石の経石を海底に沈めたとされており、工事完成の功績をたたえた石碑が置かれています。音戸の瀬戸は現在でも呉と四国とを結ぶ主要な航路となっており、多くの船が行き交っています。

図2 倉橋島にある桂浜の入り江

図4 音戸の瀬戸

図3 復元された遣唐使船

図5 音戸大橋と清盛塚

5 江戸の町並みが残る御手洗

更に時代を進めて江戸時代には、帆船が建造され、航海技術も進化して地乗り中心の航海から、沖乗り中心の航海へと変わりました。沖乗りでは潮風に乘せて船を一気に進めることが可能で、物資の輸送能力が高まりました。瀬戸内海は西回り航路の中心として発展することになります。御手洗は西回り航路の拠点として潮待ち・風待ちをする船が多く立ち寄り、中継貿易港として栄えた港町です（図6）。今でも、古い歴史的な建物が多く残り、町を歩くとタイムスリップしたような情緒豊かな町並みが見られます。町の中心となる常盤町通りには間口の狭い町屋が並び（図7）、京都に似た風情です。御手洗は瀬戸内海航路のほぼ中央に位置し、周辺の潮の流れも穏やかで船着場としても良港となる特徴を有していたようです。

ところで、御手洗のある大崎下島は、以前は船でしかアクセスできませんでしたが、今は安芸灘大橋（橋長1,175m）、豊島大橋（橋長903m）など大小七つの橋から成る「安芸灘とびしま街道」が開通して気軽に車でも行けるようになりました。大崎下島は瀬戸内海の温暖な気候を利用したみかんの栽培も盛んで、御手洗に隣接する大長エリアでは美しいみかんの段々畑を見ることができます。最近では一般的な冬みかんのほかに、「でこぼん」、「はるみ」、「せとか」等々、いろ

図6 港に面して静かにたたずむ御手洗

図7 江戸時代の風情が残る町並み

いろな品種が栽培されていてみかん狩りも楽しむことができます。

6 軍港として発展した呉

最後に明治時代以後の近代化の様子を交えて、呉の街を御紹介させていただきます。本コラムの冒頭にも述べましたが、呉は明治時代、海軍の鎮守府が置かれ軍港として栄えました。当時、旧海軍条例によって日本近海の海域は五つの海軍区に分割され、海軍区ごとに鎮守府が設けられて統治が行われていました。呉は明治22年、横須賀に次いで第2海軍区の鎮守府として設定されました。呉に鎮守府が置かれた理由としては、呉は瀬戸内海の島々に守られた内海に面し、防御の点で有利であったからと言われています。図8の写真は旧呉鎮守府の庁舎で、今は海上自衛隊呉地方総監部第一庁舎として使用されています。れんがと御影石を組み合わせた趣のあるたたずまいです。ちなみに図8の庁舎は第2代目で、初代呉鎮守府庁舎は明治38年の明治芸予地震で半壊し、建て直されたということです。

明治時代、呉の街には鎮守府が置かれたことに合わせて海軍兵学校や海軍工廠が置かれ、多くの人が集まりました。特に呉海軍工廠は、日清戦争の際に軍備品の製造や艦艇の修理の役割を担い、その後、軍艦の建造拠点として発展していくことになります。後に多く

図8 旧海軍呉鎮守府庁舎
（現海上自衛隊呉地方総監部第一庁舎）

図9 現在の呉港

図 10 戦艦大和の 1/10 の模型

の艦艇が建造され、戦艦大和が建造された話は有名です。第2次世界大戦の終戦をもって呉海軍工廠は閉じられますが、それまで工廠を支える人材を教育するために、職工教習所や工員養成所が開校され、多くの優秀な人材が集められたと聞きます。図9の写真は現在の呉港の写真ですが、クレーンが多く集まっている辺りに戦艦大和が建造されたドックがあります。今はジャパンマリンユナイテッド株式会社の敷地となり、戦艦大和のドックはもう使用されていないということです。周囲には新たなドックが造られ、大型タンカーが次々に建造されています。また、呉港周辺はきれいに整備され、戦艦大和の模型（図10）が展示されている呉市海事歴史科学館（大和ミュージアム）も近くにあります。呉の近代化の歴史を振り返りながら、当時の様子を垣間見ることができるスポットとなっています。

7 おわりに

時代を遡りながら呉の街を紹介させて頂きました。紙面の制約から今回紹介は省略させて頂いたのですが、海との関わり合いで言うと、私の勤務先となる海上保安大学校も挙げさせて頂くことができるのではないかと思います。海上保安庁は第二次世界大戦後、魚雷等の危険が潜む日本の海の安全を取り戻すために発足しましたが、発足直後の昭和26年に海上保安大学校も設立し、その翌年に呉へ移転しました。これまで御紹介させて頂いた海との関係を考えますと、何か呉に引き付けるものがあつたのではないと推測してしまいます。呉を既に御存じの方も、そうでない方も、呉を知って頂く、または再認識して頂くきっかけになりましたら幸いです。

図 11 呉周辺地図（地図出典：国土地理院）

図 12 呉周辺地図2（地図出典：国土地理院）

謝辞 本コラムに記載の情報や写真の撮影にあたりましては、長門の造船歴史館・柳井敏弘様をはじめ、海上自衛隊呉地方総監部、呉市海事歴史科学館、呉市豊町観光協会の皆様に大変お世話になりました。この場をお借りして厚く御礼申し上げます。

山中仁昭（正員）

平11阪大・工・通信卒。平14同大学院工学研究科博士前期課程了。平22同博士後期課程了。博士（工学）。平14から広島国際大・社会環境科学（後に工学部）・助手、助教、講師。平27海上保安大・海事工学講座・准教授。広島県生まれ。広島が好きで大学卒業とともに広島に戻り、呉に住んで16年目。小型船舶免許の取得に向け勉強中。